

主体的な学習の推進を！

～「好む＝楽しい」から「楽しむ」へ～

孔子の教えをまとめた『論語』の中に、次の有名な言葉があります。『これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず。』

口語にすると、「あることを理解している人は知識があるけれど、そのことを好きな人にはかなわない。あることを好きな人は、それを楽しんでいる人にはかなわない。」ということです。“知る”→“好む”→“楽しむ”の順で学習意欲が高まるということだと思います。これは、“主体的な学習”に大きくかわることだと思います。

ちなみに、本稿のメインタイトルの「think about 学校を“楽しむ”」は、ここから名付けました。

“知る”と“好む”と“楽しむ”とは、どう違うのでしょうか。例えば、ある教科はあまり“好き”ではないけれど、テストがあるから仕方なく覚えたという経験はよくあります。これが“知る”段階だと思います。それよりも、その教科が“好き”な子供の方が積極的であるということは容易に理解できます。その教科が“好き”ということは、その教科を学ぶことが“楽しい”ということだと思います。

過日、朝のテレビ番組で、6歳くらいの子供が、母親が見せる20枚ほどのカブト虫の写真を見て、次々に名前を言い当てるといった動画が紹介されました。難しい名前を全部言い終えた子供が大満足でソファに横になりました。「あ～疲れた」と言うのかと思いきや、ニコニコしながら「もう一回やりた～い」と言ったのです。その子にとってカブト虫の名前を覚えることは学ぶという感覚ではなく、

とても“楽しい”ことなのでしょう。学ぶことが“楽しい”とはこういうことなんだと思いました。

このように“楽しい”と思えることならば、だれでも積極的に学習に取り組むはずで、だからまず教師は、子供たちが学ぶことの楽しさを実感するような指導をする必要があると思います。

学校の勉強が“楽しい”と思うようになった子供に聞けば、その理由を、「その教科内容が分かるようになったから。」「その先生の教え方が好きだから。」「本やネットを見て好きになったから。」など色々教えてくれると思います。しかし、特定の教科では“楽しい”と思えたとしても、他の教科もそうかという、なかなか難しい問題です。すべての子供たちが学校で学ぶことをすべて“楽しい”と実感するのは容易ではありません。「学校の勉強は苦手、嫌い」と思っている子供はたくさんいると思います。そのような子供たちには、“やらされ感”が満載だと思います。「好きになれないものは仕方ないですよね」と言っていたのでは教師の名が廃ります。

そこで、“楽しむ”ということが重要になってくると思うのです。これは主体的な態度です。たとえ“好き”でなかったことでも、その教科のいろいろな側面からアプローチして“楽しむ”ことができるようになったら、それが最上の学習態度ではないかと思うのです。教師はその強力な支援者になってほしいのです。

では、具体的な指導法はどうしたらよいのでしょうか。これは難しい問題です。でも教師ならばやらなければならない重要な仕事でもあります。

かつてイチローの打撃投手を務め、現在は野球の指導者である奥村幸治さんのお話では、主体性を持たせるには“自分の頭で考えさせる指導”が重要だ

と述べています。例えば「60分かかる仕事を50分でやりきるには、どう工夫したらよいか」という問いを投げかけることで、当事者が“自ら考える習慣”を身に付けていくのだと言います。「私の一番の目標は、イチローのように自分の頭で考えることができ、高い目的意識を持って、物事をやり抜く力を備えた選手を育てることにあります。いま野球に打ち込んでいる中学生のほとんどは、将来プロ野球選手にはなれません。けれども野球を通じて培った“目的意識を持って取り組む姿勢、自分の頭で考える力、困難にめげずにやり抜く力”は、社会のどんな場面においても役立つはずです」と述べています。

もう一つの事例を紹介します。それは私が『NITTAIDAI×自治体フォーラム』に参加した折、見せていただいた発表の一つです。教師役の教員と子供役の教員が登壇し、『靴ひもの結び方の指導』を行いました。教師役が子供役に、「まず左手一本で結んでみてください」と言いました。結び方の指導は何もしません。すると子供役が一生懸命に左手を動かしながら何とか結ぶことができました。教師役は「よくできました。では次に、右手だけで結んでください」と言いました。子供役は苦勞しながらも前よりいくらかスムーズに結びました。「最後に、両手で結んでください」と言うと、子供役はすいすいと結び終わりました。そのあとで、「どのようにしたらうまく結べましたか」と問うと、子供役は自分で考えたやり方の工夫を述べました。「これが私たちの指導法です。この中でこの子供は自ら考えて、工夫をして、両手で結ぶことの便利さを学んだのです」と締めくくりました。“本人の試行錯誤の中から気づきを得る”という指導法です。教師はそのためのコーチングをする役です。

これらはほんの一例ですが、私は“自ら考える教育、気づきを得る教育”の大切さを学ばせていただきました。“教え込み教育から、考えさせる教育へ”これが学びを“楽しむ”ことにつながるのです。

かつての私は、「ここがよくなかったね」「こうしたらもっとよくなるんじゃないかな」などと“教え込み”教育をしていました。「どうしてそう考えたの」「どうしたらよりよくなるかな」と問いかけてやれば、もっと子供たちは“自ら考える”ようになったのではないかと反省しています。学びを“楽しむ”きっかけを与えてやるのが教師の指導だと思えるようになりました。

子供たちは、このような“気づきを得る方法”を身に付けることによって、はじめは“好き”ではない学習であっても、それを“楽しむ”ことができるようになるのではないのでしょうか。それは子供たちの人生においても大いに役立つ資質だと思います。

“知る”から“好む=楽しい”へ。そして“好む=楽しい”から“楽しむ”へ。子供たちの“主体的な学び”はこのような流れで強くなっていくのではないのでしょうか。それを導く役割が教師にはあるのだと思います。学びに向かって、子供たちの目が、らんらんと輝くような学校になったらうれしいなと心から思います。

(市川三郷町教育長 渡井 渡)

